

令和5年度 酒田西高校定時制の課程 学校評価書 （自己評価・学校関係者評価）

教 育 目 標			重 点 目 標		達成度	
1 感性豊かで思いやりのある心を持つ人間を育成する。			1 基礎学力の定着・向上と、「よりよく生きるための力になる勉強」という視点からの学習指導		A 達成している	
2 社会において豊かに生きることができる基礎的な能力を持った人間を育成する。			2 人間関係形成能力の育成		B おおむね達成している	
3 逞しい気力と体力を育て、地域社会に貢献できる人間を育成する。			3 安心・安全な学校づくり		C あまり達成していない	
			4 特別支援教育体制の充実		D 達成していない	
			5 新教育課程の着実な実施			

	Plan		Do	Check	Action	学校関係者評価	総 括
	教育目標・方針・重点目標実現に向けた取組課題・具体的方策		目標の達成状況 達成にむけた取組み状況と分析	評 価	○成果 成果と課題 ・課題	意見・要望・評価等	
1	基礎 学 力 の 定 着 ・ 学 習 意 欲 の 向 上 指 導 「 よ り よ く 生 きる た め の 力 に な る 勉 強 」	放課後等の有効活用による、個々のニーズに応じた指導の充実	・昨年度と比べて、放課後残って学習する生徒の数は減少しているが、検定試験合格に向けた個別指導も実施した。 ・特別支援教育支援員の助けを得ながら、個別学習を行った。 ・年次担任を中心に生徒の状況に対応した二者面談や三者面談を実施した。 ・卒業予定者に対して、指導指導主事、各担当者が進路希望実現に向けたサポートを行った。	B	○高卒認定試験、各種検定試験において、多数の合格者を出すことができた。 ・高卒認定試験の科目等の変更により、三修することが難しくなっている。入学希望者に丁寧な説明が必要であると思われる。 ・生徒の主体的な学習活動を促すためには普段の授業からの動機づけが大切である。	○様々なガイダンスが進路意識の向上につながり、そのことにより学習へのモチベーションが上がっていくことも期待したい。 ○アンケートの結果において、数値が上がっている。日々の丁寧な指導の結果である。	○多様な支援を要する生徒への対応として、チーム・ティーチングによる指導等、手厚いサポートを行っているが、個々の学力差、ニーズに応じた指導という点をより一層心がけていかなければならない。
2		進路希望や興味関心などを足がかりとした学習意欲の向上	・進路希望調査を3回行い、生徒の希望状況から進路への興味関心を確認しながら進路指導を実施した。 ・定期的なガイダンスの実施や、外部講師を招聘した講話などにより生徒の興味関心を引き出し、進路意識を高め学習意欲の向上を図った。 ・総合的な探究の時間を活用し、進路学習を深めたことで生徒の意識の向上が図られた。	B	○1年次生も初期段階より具体的な職業についての知識を得ることができ、進路意識の向上へとつながった。 ○担当教員を配置して個別指導にあたり、進路希望実現へとつなげることができた。 ・進路希望が不明瞭、興味関心が薄い生徒に対する動機づけの指導。		
3		「生徒の授業評価」等を活用した授業の改善と、探究的・体験的な学習機会の拡大	・年2回の「生徒の授業評価」を実施し、各教科で必要に応じた指導改善を行った。 ・一人一台端末を活用し「総合的な探究の時間」に取り組み、探究的な学習機会を確保した。	B	○ICTの活用により、より探究的な学びを行うことができた。 ・コロナ5類移行に伴い、ワークショップ的な講話等を充実させる。		
4		チーム・ティーチングによる効果的な学習指導の推進	・TT実施により、学力差のある生徒、多様な生徒に対して適切な支援ができた。 ・「生徒の授業評価」から良好な状況が伺えた。	A	○基礎学力不足の生徒に別の課題を設定したり、そばでサポート・助言しながら学習補助をする等、TTの利点を活かすことができた。 ○生徒が安心して学べる環境作りへとつながった。 ○学力差による指導上の難しさを軽減することができた。		
5	人 間 関 係 形 成 能 力 の 育 成	コミュニケーション能力・自己表現力の育成	・授業やHR活動で、テーマを与えて30秒程度で話す言語活動を取り入れ、自分の意見や体験を話すことに慣れる機会を設定した。また、学校行事で発表の機会を設けた。	B	○経験を積むことによって、自己表現力が向上してきている。 ・「主体的・対話的で深い学び」の授業によるコミュニケーション能力、自己表現力を向上させる。 ・発表することを嫌がる生徒に対する指導と支援。	○生徒の自主性を重んじた活動が展開されていることは評価に値する。 ○地域連携という点において、その意義も含めてより効果的な活動について今後、検討してほしい。	○生徒会を中心とした学校行事への取り組みが浸透し、生徒が主体的に、また、創意工夫しながら各行事を成功に導いた。 ○進路ガイダンスや講演会を通して、地域産業により効果的な活動について考える機会を得た。
6		学校行事、生徒会行事、部活動の充実と、自主的・自律的行動力の育成	・生徒会を中心に、行事等の運営を生徒自ら行うことができた。 ・1年次から生徒会執行部に自主的に参加する生徒が多かった。	A	○生徒会が中心となり、生徒が自主的・主体的に参加できる各種学校行事を企画・運営した。 ○運動部の通年活動が定着してきている。 ・文化部作品未提出者に対する指導と支援。		
7		地域と連携した教育活動の推進	・ホームページを活用し、学校行事の様子や毎月の行事予定、保健だより等を随時掲載し、情報発信した。 ・トップセミナーでは、地元で活躍する起業家の講話により、地域産業について知ることができた。	B	○ホームページによる情報発信。 ○文化祭等を通して地域との交流を深めることができた。 ・ボランティア活動等、地域や外部機関との連携。		
8		進路意識向上のためのキャリア教育の充実	・キャリアアカウンティング事業、進路講話、WAKUWAKUWORKなどを実施し進路意識を高めることができた。	B	○年間計画に基づく計画的な進路指導のもと、生徒のニーズに応じて継続した指導を実施することができた。 ・意欲の無い（湧かない）生徒に対する指導と支援。		
9		「ポストコロナ」期における新たな学校生活、教育活動の再検討と構築	・コロナ以前の教育活動に戻すことを意識しながらも、全く同じではなく、生徒に実態に即し、さらに進化した形を模索した。	B	・生徒の実情に応じた学校行事（外部で実施する行事含む）の検討。 ・前年度踏襲にとらわれない諸活動の見直し。		
10	安 心 安 全 な 学 校 づ く り	安全かつ安心な学習環境の整備	・毎月「学校安全点検」を実施し、校内の安心・安全な学習環境を整備することができた。 ・感染防止対策として、個々による予防対策を生徒に呼びかけるとともに、教室内の換気を継続して実施した。また、空気清浄機を設置することができた。	A	○感染状況に応じた適切な感染防止対策を継続することができた。 ○毎月の「学校安全点検」を中心に、日々の安全・安心な学習環境の整備に努めた。	○少人数の良さを生かした教育活動が行われている。 ○生徒自身の健康管理について、さらなる工夫をもって呼びかけ等を継続してほしい。	○安心・安全な学校生活を送れるよう環境整備に努め、夏の猛暑も事故無く諸活動を実施することができた。 ○ホームページの更新に努め、地域・保護者等に情報を発信することができた。
11		特別支援教育への理解に基づいた生徒理解の深化と、組織的な支援の充実	・「高等学校におけるLD等通級による指導研究事業」の協力校として、各校との情報交換や校内研修会を実施した。 ・定例職員会議や朝会を利用し、生徒情報交換による生徒理解、情報の共有や連携を行った。 ・スクールカウンセラーによる支援を要する生徒へのアドバイスや生徒状況の情報共有を図った。	A	○様々な場面で生徒情報交換による生徒理解、情報共有のもと、必要に応じた適切な対応を図ることができた。 ○特別支援教育に関する様々な研修会をオンラインで教職員が受講し、理解の深化に努めた。		
12		健康教育の充実と自己管理能力の育成	・5月に交通安全講習会、避難訓練、6月に情報モラル講座、7月に食育講話、9月に薬物乱用防止教室を実施し自己管理能力の向上を図った。 ・6月12日（月）に花苗を植栽し、年次毎に水かけを行った。 ・「保健だより」の発行やブラックボードを活用したブログで、健康管理等の情報提供や注意喚起を行った。	B	○地震災害を想定した避難訓練と外部講師を招聘しての防災学習会を実施することができた。 ・定期的な「保健だより」の発行、ブラックボードによるブログなどで、日頃からの自己の健康管理、感染防止対策をよびかける。 ・講話、授業等あらゆる機会をとらえ、生徒が規則正しい生活をはじめとした自己管理ができるようはたらきかける。		
13		保護者との信頼関係の強化に向けた努力の継続	・年次毎に保護者との面談を実施した。 ・欠席連絡について、「さくら連絡網」を利用した欠席連絡により簡易化に努めた。 ・ホームページを活用し、学校行事の様子や毎月の行事予定、保健だよりなどを随時掲載した。また、さくら連絡網を用いた情報発信も行った。	B	○さくら連絡網、ホームページを効果的に活用し、情報発信を行うことができた。 ○保護者対応に関する研修会を実施した。 ・face to faceによる信頼関係の構築。		
14	特 別 支 援 教 育 体 制 の 充 実	すべての教職員の共通理解に基づく通級教室の円滑な実施と専門性の向上	・通級指導教室「ライフスキル」を実施した。（現在は2年次生1名） ・職員会議で定期的に実施内容を報告し、情報の共有を図った。 ・教職員によるアセスメントチェックを実施し、通級指導対象者の確認を行った。	A	○適応指導委員会を中心に個別教育支援計画、個別指導計画を作成し、職員間での指導方針の確認・共有を図りながら組織的な対応で円滑な通級指導を実施することができた。 ○特別支援巡回相談等の活用。	○全教職員による協力体制が構築されている。 ○外部関係機関との連携により、多様な支援を要する生徒に対して適切な対応がなされている。	○特別支援教育について、様々な研修会への参加により教職員の資質向上に努めた。 ○通級指導について、教職員間で定期的に情報共有を行うことができた。
15		外部専門家等を活用した研修機会の充実による教員資質の向上	・オンラインの研修会を利用した様々な研修会を実施し、特別支援教育についての資質向上を図った。 ・酒田市福祉部こども未来課やSSWとのケース会議を実施した。	B	○オンラインによる簡易な研修会を積極的に活用した。 ○SSW訪問を複数回実施できた。 ・必要に応じたケース会議の開催。		
16		行政、医療、NPO等関係機関との連携の強化	・個別のキャリアアカウンティング事業や酒田市ハローワークとの連携による就労支援を実施した。 ・7月26日にSCIによる生徒理解研修会を開催し、職員間での共通理解を図った。	B	・行政、医療機関、SSW等とのさらなる連携。		
17	新 教 育 課 程 の 着 実 な 実 施	生徒の実情に応じた、効果的なICT教育の推進	・教科毎に、Googleフォームを用いた小テストの実施やジャムボードの活用に加え、フォームでの進路希望調査実施等、積極的な使用が見受けられた。 ・Googleクラスルームを用いての連絡、情報発信が行った。	B	・教員が、「習うより慣れる」という意識のもと、積極的な活用に努める。 ・Chromebookを活用した授業により、生徒の実情を考慮しながらICT教育の推進を図る。 ・校内研修会を実施し、実践事例の情報共有を図る。	○ICTを活用しながらも“face to face”を大切にしながら授業を実践してほしい。	○ICTの活用について、授業、探究活動に加え、進路希望調査等でも活用しているが、今後、さらなる効果的活用を研究、実践していかなければならない。
18		本校の実態に即した観点別評価方法の確立	・基準等の評価方法について共通理解をはかり、学校として統一された観点別評価を実施した。 ・教務課主導で資料等の提示が行われ、各教科で評価方法について検討することができた。	B	・職員研修のさらなる充実。 ・各教科における指導と評価の一体化を推進する。		
自己評価及び学校関係者評価の改善点			・自己評価については、「ポストコロナ」期における新たな学校生活、教育活動の再検討と構築の項目を追加した。 ・学校関係者評価については、定時制活動状況の周知方法を検討する必要がある。（定時制への意見や要望、評価しやすい情報の周知）				